

水利事業が、平行して行われることが必要であった。このことはオム章で概説しておいたが、更に水害を契機として明治へ大正にかけて、大地主への土地集積が進められ、農地解放前の小作地率 60% の高率で食害の差が著しかった。現在、これらの問題は解決したが、現在進行中の国営印旛沼干拓事業が、農業用水の水利施設、秩序野を通過して、地域へ役観を与えるであろう。

本地域の性格は、一言にして云えば、利根川と印旛沼の間に位置する自然的位置から来る制約、即ち、低湿で常に水害の危険にさらされ、更に、地形の制約をうけて、動力揚水機が、水田農業に不可欠であること、及び東京に近いことが、行商の発達を促し、利根川流域の単純な一毛作地帯にあつて、島畑での蔬菜栽培が盛んで、都市の膨張と共に、行商は衰えをみせず、発展をうけるであろう。最近の動力耕耘機の導入に始まる機械化は水稲中心の本地域に於ても著しく、労働力の不足が、茨城県からの季節労働者に依存している現状を打破する解決手段は、これ以外に求められない。

中部九十九里海岸平野の地形と土地利用

高井良光子

地域と論文構成

卒業論文作成に当り、千葉県九十九里海岸平野をフィールドに選び、その地形と土地利用の様相を観察し、地域の性格の一端を把握することを試みた。調査地域は、九十九里平野の、ほぼ中央部に位置し、西の台地下より、東の太平洋に至る、木戸川、境川間を中心とする地域である。

論文をまとめるに当って、オム章では、本地域の自然、人文環境の主たるものについて、その概略を述べ、この地域把握のオム章とし、いくばくかの問題提示とした。が、本地域の生産のほとんどの部分を依存する農業については、次の本論に譲った。本論、オム二、オム三章に於ては、それぞれ、地形、土地利用について、航空写真、実地調査、文献、資料に基づき、その現況を述べ、最後に、農業生産について、簡単に触れ、この論文のまとめとした。

地形と土地利用

本平野は、海的作用と、土地の相対的隆起によって、形成された隆起海岸平野で、その地形は、西縁台地下から太平洋まで、約 10Km あるにもかかわらず、比高 7.5~1m、勾配 $1/1000 \sim 1/300$ で、極めて平坦かつ一様である。この平野の地形の最大の特徴は、海岸線に平行に並ぶ砂堆列と、その後背湿地である堤間低地列である。この二地形面は、本平野の大部分を占め

るが、比高にして、50cm~1mのわずかで、比高によって両者を見極めることは困難なほどである。しかし、土地利用は、この地形を敏感に反映し両面は画然たる相違を示している。すなわち、わずかな比高、形成環境、排水環境の相違によって、砂埜は集落、畑、平地林に、堤間低地は排水不良の一毛作田となっている。又両者の移行的な部分では、掘り下げ田と島畑景観が卓越している。これは、用排水設備の欠陥と云う欠点を、高地下水位を利用して補った自然への消極的利用の現われと思われる。この平行堤列を横切つて、木阿川、境川が小規模な谷底平地を刻んで太平洋にそいでいる。これら河川は、川中狭く、従つて水壘もわずかで、灌漑用水として全域にいたらず、海岸寄りに一部天水田地域を現出させ、早害常襲地域となっていた。しかし、昭和36年ノ部使用を開始した両総用水によって、安定の方向に向いつゝある。

産業別人口71.6%を占める農業を見ると、経営規模は、平均10.1反で主穀作を主幹部門とするが、湿田による米作の不安定性を補つて、小麦、甘藷、落花生中心の畑作及び養豚、養鶏を伴う畜農業が行われ、比較的恵まれた農業経営を行っている。又、気候、土壌、近距離市場に恵まれ、両総用排水などによって、蔬菜、果菜栽培が盛んになり、近年、都市近郊的性格を現わして来ている。現在耕作は、皆無であるが、用排水完備により、湿田を乾田化して水田酪農の道も考えられ、新しい農業経営に目を向けつつある。又、この地域には、現在、沿岸漁業不振による半農半漁民、及び農村の二、三男の余剰労働力の消化、天然ガス、両総用水使用による工業化などの問題が頭を持ち上げつつあり、典型的農村地域から、その姿を変えようとしている。

おわりに

まがりなりにも一つのまとまったものを書き終えて、その難しさを痛感すると共に、途中幾度かのつまづきをなつかしみ又反省している。それは、地域選定に当って、予備調査、知識に極度に欠けていたため莫然としたテーマしか持っていなかったことが、最後まで影響を及ぼしたこと、又、本地域は、3の事項（例えば納屋集落、漁業など）についてのもの以外の文献、資料が非常に少く、独断に走ったきらいのあること、農業に関する知識、分析力の欠陥によって、農村維持を明らかにすることが出来なかつたこと、又、この地域に存在する要素の現状記載からノ歩進んで、最初意図したような地域性の把握に至らなかつたことなど教えあげれば数多くある。しかし一地域に一年足らずの間執着して、直接自分の目で見、耳で聞き、肌で感じ、一つ

のものにまとめあげたことは、結果はともあれ、それ自体貴重な経験であった。

暖地園芸農業の地理学的考察

— 渥美半島表浜地区の場合

伴 晴子

戦後農村は着しく変化したといわれる。これには二つの面が考えられる。一つは農地改革による土地所有関係であり、それに伴う農村社会の近代化である。他の一つは科学技術の進歩により品種の改良、栽培技術の進歩によって農業それ自体が変化したことでこれによる農業生産の改善は前者とも密接な関係をもっており相互作用をしていることは自明のことである。

渥美半島は戦後の農村近代化の最も着しい地域で以前は奥渥美といわれるように後進地域の一つであったものが近年急激な発展を遂げつつある。それは花卉及び蔬菜を中心とした特殊農業の存在であり、漁業から養蚕、養鶏を至過して現在の園芸農業に至るまでの発展過程によるところが大きい。

これらのことより研究の焦点を園芸農業におき、自然的、人文的因子がどのように作用しているか。最も顕著に現われた土地利用の一形態として（これは太平洋沿岸の岬端性暖地にはその類似性を求めることができる。例えば、房総半島、伊豆半島、紀伊半島などある）その地理学的な考察を行い、地域性の把握を目的とした。

従って地域の選定には、最初から郷里の近くでもあり、最近農業の面でも観光の面においても脚光を浴びている渥美半島を調査したいと考えていたので、この場合は最終的な段階のもので、境界線をどこにおくかであるが、幸い、暖地性利用の農業であるために表浜に集中して、赤羽根町と渥美町伊良湖地区に大体限られているため、調査の便も考えて、行政区画で上記のように設定した。

調査至過を記すれば、この地域の特殊性は園芸農業にありという仮定より出発したので、先づ、園芸農業の他地域のそれとの比較を行い、全国的な位置づけをすることから始めた。具体的には市場における競合関係を調査したり、他地域のそれに関する文献をあさりなどして、大体のものが把握できてから実際の地域調査に移った。

第一章では地域の概観として調査地域の自然的環境及び人文的環境の大体を記載した。地域の沿革は主に資料、文献と地元歴史家といわれる方々にお聞きしたものをまとめた。気候は主題である園芸農家の根本的成立要因で